



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「『高校に行かない』 ことがもつ意味と中1にある 〈希望〉」
Author(s)	加藤, 弘通
Description	C: シンポジウムⅡ テーマ: 学校の限界線上における学び 「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」シンポジウム報告書: 子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画). 平成23年11月2日(水)~4日(金). 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 教育学研究院会議室. 札幌市
Citation	「遊ぶ・学・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書, 30-43
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49385
Type	conference paper
File Information	Kato.pdf



「『高校に行かない』ことが もつ意味と中1にある〈希望〉」

発表者：加藤 弘通
(静岡大学)

皆さん、こんにちは。静岡大学の加藤です。今から30分ぐらいかけてお話しさせていただきたいと思っています。今日は2つ、お伝えしたいことがあって、1つは「今の社会において高校に行かないということが意味すること」と、もう1つは「中学1年生のところにある希望」についてです。この「希望」は大人から見ての希望かもしれないのですが、それでも今の子どもたちに対して何かできることがあるのではないかという話をしたいと思っています。なぜこういうことを言うかという、若い人たちの問題とか、彼らのことを語るときに、どうしても悲観的な話が多くて、「じゃあ、どうすればいいのか」みたいな話がほとんど出てこないというのが、自分なんかはすごく不満に思っているところなので、何か少しでも良いところはないかというところを探していきたいというのが、最終的な狙いです。とはいっても、前半は悲観的な話をせざるを得なくて、後半で「じゃあ、どうするんだ」という話をしていきたいなと思っています。その前にちょっとだけ自己紹介をさせてください。今、僕は静岡大学というところにいるのですが、所属は大学院で、教職大学院といわれるところにいます。ということはどういうことかという、教えている院生さんの3分の2は現職の小中高の先生です。しかも現場でもう20年ぐらい経験を積まれてきている先生です。その中で聞く話などを交えながら、最近の中学・高校生の動向とか、彼らに必要なのかということを話していきたいと思っています。それともう1つ、大学で教えているのもそうなんですけど、実際に支援という現場に入らせてもらっています。そこであったことなども交えながら今日は話を進めていきます。

なにを話すのか？

最初に、論旨というか、何を話すのかということから言っておきます。今日は教育からの早期離脱者、具体的には中卒者についてお話しするのですが、シンプルな問いを立てるとするならば、1つは「どうなっているんだ？」というところを話していきたいなと思っています。今、中卒者というのはそんなに多くなく少数派ですが、そういう状況の中で、中学だけ卒業して、高校へ行かないということが意味することとは何か。そのことを理解するために、大規模調査の結果をもとに、中卒者の現状についてお話ししていきたいと思っています。もう1つは、それでは、そういう人たちに対して「どうするんだ？」という話をしたいと思っています。私は発達心理学が専門なので、発達的に見ていったい何か現状で打てる手はないのか、要するに、「だめになった、だめになった」ということばかり言ってもしょうがないわけですから、「じゃあ、これからどうするのか」というときに、発達心理学という限られた立場からですが、何かできることはないかという話をしていきたいと思っています。まとめると、まず前半では中卒者が置かれている現状を把握します。これはどちらかというと悲観的な話になります。それから後半の部分は、中卒者の人たちというのは、中学までは、学校に通っているわけですから、その段階でどういう関わりをすれば、教育につなぎ止められるか、その可能性をどうやって高めていくのか、というような話をしたいと思っています。

そして結論から言うと、中学1年生の、しかもか

なり初期の段階に、どうかかわるかということが重要なんじゃないかというのが、最後に提起したいお話です。

成熟志向の弱さと広域化

では、中身に入っていきます。事例から入っていききたいのですが、最近、気になることがあります。私は研究でどういう現象を研究で扱っているかという、非行少年個人というよりも、荒れる学校とか、運営が困難になってしまった学級とか集団の問題です。そこに調査や会議などいろんな形で入らせてもらって、それがどういうメカニズムで起きて、どういうメカニズムで収束していくのかみたいなことを専門に研究しています。いわゆる荒れている中学校とかに行って話を伺ったり、あるいはその立て直しじゃないですけども、会議なんかに出させてもらったり、調査して、コメントしたりみたいな仕事をしています。そういうことをする中でここ数年気になることがありました。1つは、何て表現していいか難しいのですが、成熟志向の弱さです。例えば、学校が荒れてしまったときに、中学3年生の最後の進路指導のところで、いわゆるヤンキーとか不良と呼ばれる人たちに対してどういう指導が行われるかという、先に職場体験をさせるわけですね。よくあるのは、工事現場とかに行き仕事を経験させて、それを出席として見なしてカウントしていきましょうというようなものです。ところで、昔だとそういう現場に生徒が行って帰ってくると、その作業着とかを着て中学校にわざわざ現れていたらしいのですね、仕事が終わった後に。そして、その姿を同級生に見せたら、「かっこいい」みたいな雰囲気があった。ところが、最近、中学校の先生と話をしていると、そういう職場からさっさと逃げ帰ってきちゃう生徒が結構いるらしいのです。要するに職業体験に行くのだけれど、ぼろぼろにされて帰ってきちゃうという話なんですね。それで『どうしてそんなことになるのだろう?』と思って、先生の話を知っていると、「根性がなくなってきた」みたいな話になるのですが、よくよくその生徒さんたちの話とか、今、高校中退して現場で働いている人たちの話を聞いている

と、なかなか現場は厳しいということが分かります。どうしているかということ、要するにしごきがあるわけですね。「のろのろしているんじゃないかえ!」みたいな感じで、それこそ暴力をふるわれるみたいなことがあるらしいのです。

もちろん、こうしたしごきは昔からあったみたいなんです。ところがちょっと前までは、それは『こいつは俺たちの仲間になれるか』どうかということを試すためにしごいていたらしいのです。しかし最近では不況などで状況が厳しくなっている中で、「こいつが職場に入ってくることによって俺たちの仕事が奪われるんじゃないか」という形で最初から排除を目指してやられるらしいのです。それから雨の日が続いてしまうと、職によっては仕事が無くて、ますますそこにいる人たちが不安になりますから、そうするとどうするかというと、『こいつらが来なければいいのに……』という感じで、本気でいじめに入って排除しちゃうみたいなことが、どうも起きてきているらしい。そう考えると、生徒たちの根性だけの問題じゃないだろうし、さらにはそういう職場に対してあこがれる意識や『早く社会に出たい』といった成熟志向はなかなか育たないだろうなと思います。

それからもう1つ気になることがあって、それは広域化といわれる問題で、非常に広い範囲で非行少年の人たちが簡単につながってしまう現象です。昔だったら抗争みたいに対立することはよくあったのですが、今はすぐにすごく遠くの人たちと仲良くなっちゃうみたいなんですね。このことと関連して、象徴的な出来事がいくつかありました。それは何かというと、いわゆる地元の不良グループでかなり上の方まで行った人が、仕事を探して、都市部に出て行った。ところが、精神的にボロボロになって保護されて、地元に戻ってくることが、何件か続いたんですね。

私はそれを聞いて思ったのは、地元の不良グループで上の方までいっているということは、かなり地元に対しては幅を利かせている人たちなのだから、なぜわざわざ外に出て行ってそんな苦しい思いをしているのかということでした。そこで不思議に思って、周りの非行少年などに関わりのある人に聞いてみると、いわゆる地元で強かったというか、幅を利

かせた人たちが、あんまり地元に残ってないということを聞きました。何が言いたいかというと、中学生でも活動範囲が広域化しているのだけれども、地元で昔幅を利かせたちょっと上の世代の人たちもなかなか地元に残れなくなって、離脱していく人たちが増えているのかなということです。

長くなりましたが、成熟志向の弱さと活動範囲の広域化、この2つを念頭に置きながら、調査で今の子どもたちの現状がどうなっているのかという話をしていきたいと思います。今日はいくつか絞ってお話ししないとまずいので、進学意識という視点に絞りたいと思います。進学意識というのは、「(中学校、高校、専門学校、短大、大学のなかで)自分はどこまで学校を続けると思っているか」ということです。その意識の違いによって、実は生活世界のありようが全然違うんじゃないかなということを、まずは示していきたいなと思います。

中卒者の意識と現状

時間もないので、調査（青少年問題調査研究会、2009）の概要についてはさっと言っていきたいんですけど、全体でどういう調査だったかというと、全国6府県の中高生4,780名を対象に行われた調査で、かなり広範囲にやっていること、サンプリングもされているということを確認してください。あともう1つは、この中には非行少年も1,090名含まれています。全国で補導された人たちにも聞いているので、それなりのサンプル数があるということを理

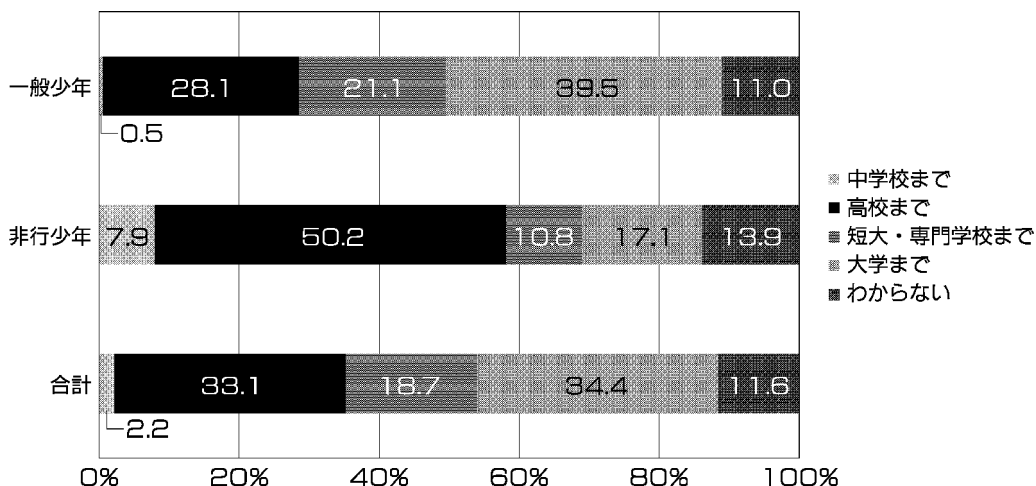
解して聞いていただきたいと思います。今から進学意識の違いによるデータの差をざっと見ていってもらいます。まず調査対象者の構成はこんなふうになっています。グレーのところに注目していただきたいんですけど、一番左のところが、いわゆる中学でもう学校をやめちゃうよという人たち、もうそれ以上進学しませんという人たちを表しています。

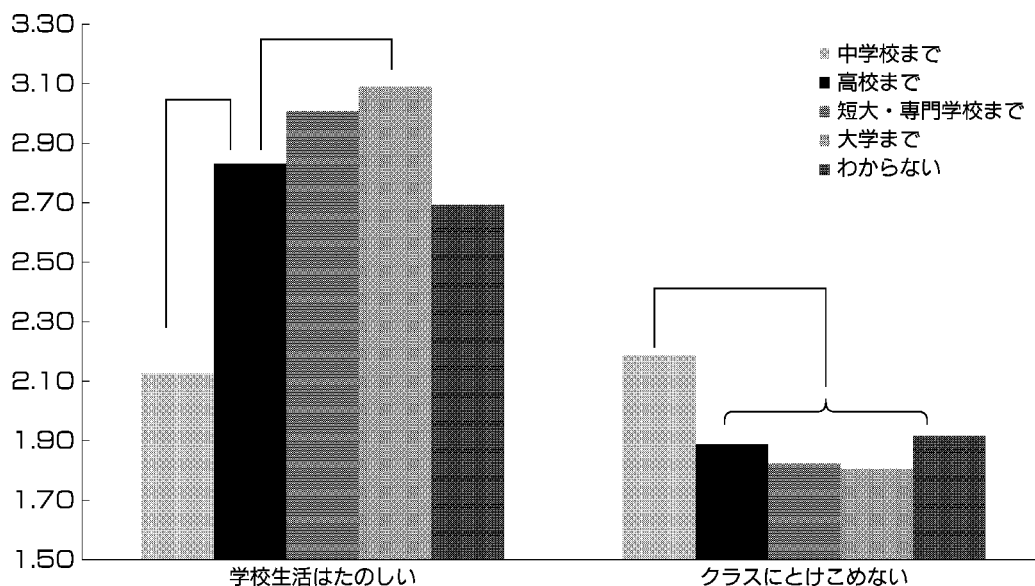
全体で見ると、2.2%ぐらいが中卒で社会に出ていくというか、この時点で「高校は行かないよ」と言っている人たちです。ちなみに、この調査を実施したのが2008年度で、その年度の高校進学率は97.8%です。

これから、中学でやめちゃうよ、高校でやめちゃうよ、専門学校まで行くよ、大学まで行くよという人がどのような意識をもっているのかをざっと見ていきます。まず学校についてのことを聞いてみました。ラインが入っているところは統計的に有意な差があるということを意味しています。

学校生活とそこでの人間関係への意識

次ページのグラフの一番左の棒を見ていただきたいんですけど、この人たちが、いわゆる中卒者になるだろうという人たちです。やっぱり「学校生活は楽しい」という得点が低いですね。それから「クラスにとけこめない」というのは、逆に高いです。ちなみに、この質問は「ぜんぜん当てはまらない？」とでも当てはまる」までの4件法で聞きました。まとめるとこの2つの質問から、中卒者の人は「学校で





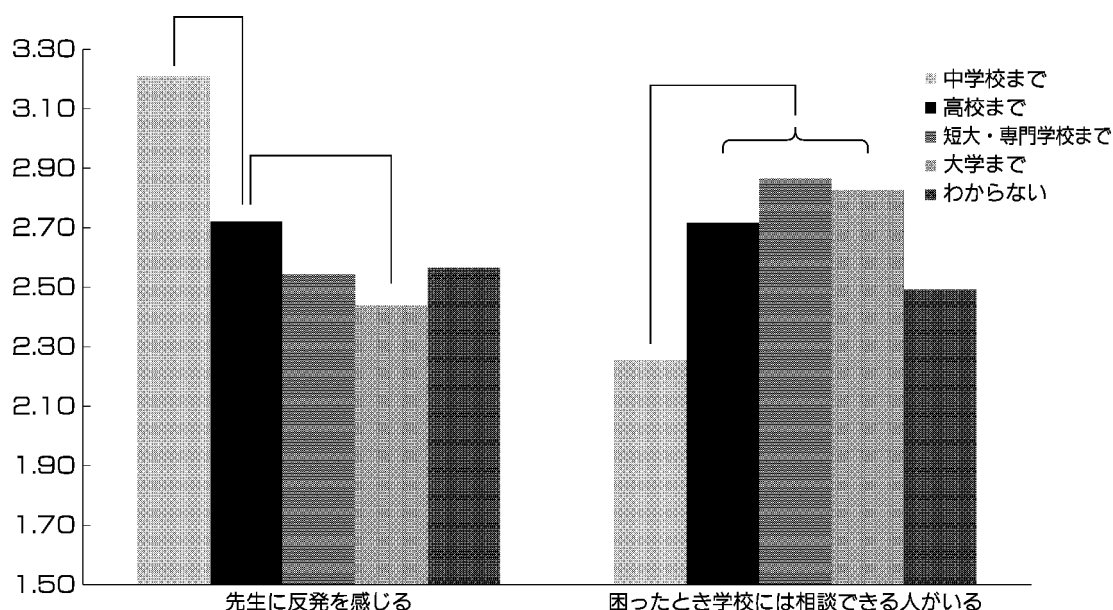
居場所がないのだろうな」ということは、よく分かるのではないかなと思います。これが1つめです。

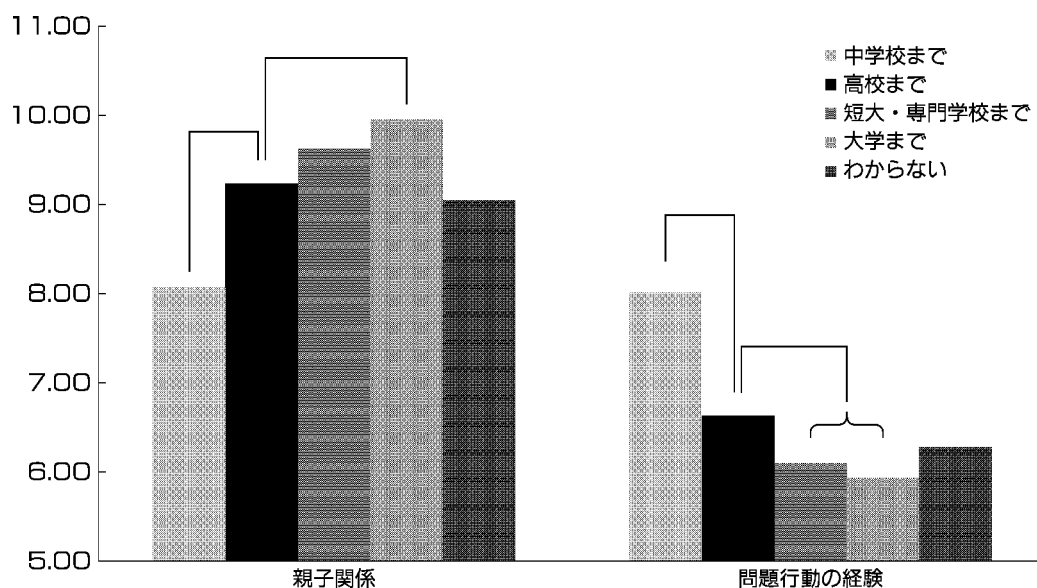
それでは人間関係はどうでしょう。例えば、私は、中学でやめる人で不良と言われる人たちというのは、わりと友だちと仲良くやっているのではないかなとか、意外に先生からかわいがられたりするのではないかなと思っていました。ところが、「先生に反発を感じる」というのが高く、「困ったとき学校には相談できる人がある」というのが低いという結果でした。つまり、学校の中の人間関係でもなかなか厳しい状況に置かれているのではないかなというのが、この調査で分かったことです。

家族・地域への意識

どんどんいきたいと思うのですが、じゃあ、親子関係はどうか。次ページのグラフを見て下さい。予想通りなのですが、あんまりよくないわけですね。それからその一方で、問題行動の経験、(この1年の間に)「喫煙をしたことがありますか」、「飲酒をしたことがありますか」とか、それから「人を脅してお金を取ったことがありますか」みたいな点は、やっぱりほかの子たちよりも高く予想通りという感じでした。

私がこの調査をやっていて、『意外だな』と思った



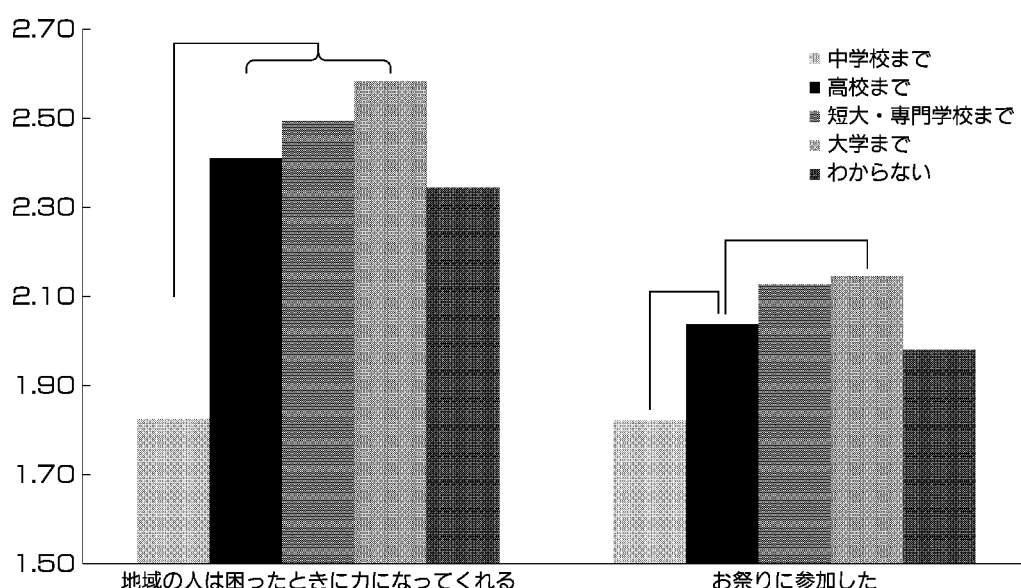


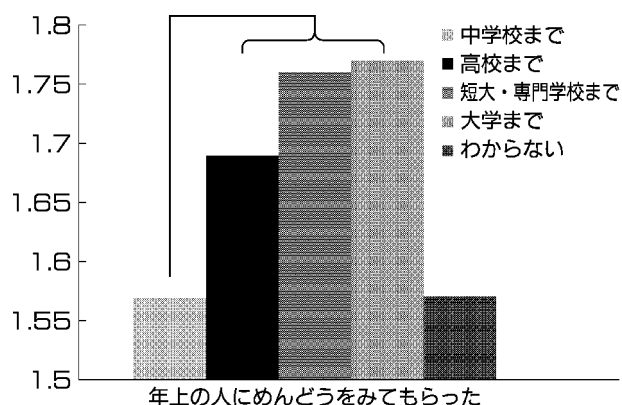
のは次からです。中学で学校をやめる人たち、その中には不良と言われる人たちが多く含まれるのではないかと思います。彼らは地域の中では彼らなりのコミュニティを持っていて、やりとりなんかしているのではないかと今までは思っていました。そこで地域との関係を調べてみました。ところが、例えば、「地域の人が困ったときに力になってくれますか？」という得点も圧倒的に中学で学校をやめるよという人が低いのです。

それから、僕は不良といえはお祭りだろうと勝手に思い（本当はそんな安直な発想ではまずいのかもしれませんが）調べてみました。ところが、お祭りへの参加度も非常に低い。それで思い出したのは、自分が、かつてかかわっていた学校のことです。こ

の学校は生徒たちの非行化傾向が非常に問題視されていたので、夏祭りでの問題を警戒して、教員による警備を厳しくしていました。それで夏休みが終わった後に校内会議があったので行ってみると「今年は不良グループの子たちが1人もお祭りに現れなかった。よかった、よかった」みたいな話になっているわけですね。居場所という視点で考えると、地域の行事に居られない状態になっていると考えると、本当にそれがいいことなのかなと思うこともあります。

それからもう1つ意外だったのは、「年上の人にめんどうを見てもらった」というのが低いことです。中卒者＝不良少年にはならないにしても、どちらかというとそういう人たちが多数含まれていると思わ





れます。それで不良グループというのは上下のつながりがしっかりしているのかと思いきや、やっぱりそんなことないのだなというのが調査の結果から感じたことです。

ケータイ電話の使用

では、「何か彼らが優っているところがあるのか」ということを見ていったら、1つは携帯電話の使用頻度が非常に高かったです。例えば「中学校まででやめます」と言っている人たちというのは、平均して1日に電話を7回以上かけています。それからメールは65回以上、きれいに進学意識と対応していて、進学を早々に切り上げる人たちほど、携帯電話・メールの使用頻度は高いです。

それから、mixiやモバゲー、出会い系サイトといったウェブサービスとの接触でいうと、やっぱりその利用率なんかも、中学まででやめちゃうよという人たちというのは高い。つまり、中卒者というのは、学校はそんなに面白くないかもしれませんが、携帯の使い方とかメディアとの接し方とかはよく知っている。ただその分、携帯への依存度も高いです。例えば、「携帯電話がないと落ち着かない」とか、「夜寝るときも携帯電話を枕元に置いてある」というようなことを聞いているのですが、そういうのを見

表 進学意識の違いによる携帯電話の使用頻度
(一日の使用回数の平均値)

	中学校 まで	高校 まで	短大・ 専門学校	大学 まで	わから ない
電話の回数	7.16	3.64	2.38	2.17	2.92
メールの回数	65.35	51.63	38.26	28.16	43.44

ると、やっぱり中学まででやめちゃうよという人たちが非常に高いという結果が出ました。

ここまで駆け足で来たのですが、何となく中学で学校へ行くのをやめちゃうよという人たちの実態を知っていただけたのではないのでしょうか。ここで一度、中間まとめをしておきたいと思っています。簡単に言ってみれば、進学意識によって生活世界とか人間関係も違うし、学校での感じ方も、それからメディアとの接し方も違うということです。

具体的に言うと、学校が楽しくなく、クラスには溶け込めてない感じを持っていて、教師との関係も良くなく、困ったときに相談できる人もいないというのが、中学で教育を切り上げる人たちにとっての学校の雰囲気なんじゃないかなと思います。家庭については、親との関係もよくなく、問題行動を取る頻度も高い。それから地域についても、これもまた困っているようなときに助けてくれたり、面倒を見てくれる人が少ない。でも、メディアに関していえば、携帯の使用頻度が高く、ウェブサービスの利用度は高いという感じです。つまり、学校から早く離脱する人ほど社会的に包摂されていないということです。その代わり携帯やウェブといったメディアへの接触は高いので、いろいろな情報は入ってきているというのが現状なんじゃないかなと思います。

私はこの結果を見たときに、『なるほど』と思ったと同時に、要するに問題というのが広域化しているということは、地元からの離脱を意味しているのだなということです。社会学だと「地元つながり文化」(新谷, 2008)という言葉があるらしいのですが、中卒者というのは、その地元つながり文化から離脱しちゃっている。適切な言葉か分からないのですが、低学歴の人たちの流動性が高まっていて、地元に残らないでどこかに行ってしまうのだなということが、このデータなんかを見ながら感じたことです。これは私の個人的な印象かもしれないですけど、自分が中学生・高校生のときを思い返してみると、だいたい学歴の低い人ほど、つまり、中卒者の人ほど、地元に残った気がするんですね。その次に高校へ行った人たちが、その町から出て隣の市に行くとか。そして大学に行く人たちはさらに遠くまで行っているという感じ。このように学歴が高い人たちがほど流動性が高いという印象を持っています。実際に

自分の身近なところでいうとそういう感じでした。しかし、それが今は逆になっちゃっていて、今、学生を見ていると大学生の地元へのUターン率とか高いですよ。

大学生の人たちが地元に戻ってきて、昔は高卒者などがついていた職業をあっさりってって、高卒者の人たちが、中卒者の人たちがかつては就いていた職業に就く。そうすると不況が合わさって、地元の仕事がほとんど残ってないという状況ができ、そのぶんどり合いのときに、中卒者の人たちというのはなかなか厳しいところがあるのではないかなと思います。実は今、若い人たちの流動性に関しては私が先ほど述べたことと逆のことが起きているのではないのでしょうか。つまり、学歴の高い人ほど地元に残るような傾向です。だから不良グループでかなりいいところまでいった人でも地元に残れない。普通はそういう人は地元でうまくやっているのではないかと勝手に思っていたのですが、そんなわけでもなくて、大都市を転々としながら、最終的にはぼろぼろになって地元に戻ってくるみたいな現状があるのではないかなと思います。そうやって考えてみると、非正規雇用の人たちが、地元から遠く離れたところでいろいろなトラブルを起こしているなんていうニュースを見ると、ある意味でこの現状を象徴しているのではないかなと素朴に思いました。

では、どうするか？

世の中をはかなんでばかりいてもしょうがないので、「こういう人たちにこれからどうするのか」ということと、「今後こういう人たちをなるべく減らしていくためにはどうしていくべきなのか」ということについて考えて行きたいと思います。まず前提として私の考えを述べておくと、私自身は、なるべく中卒ではなく、高校まで進学してもらえた方がいいんじゃないかと思っています。なぜかという、先の調査でみたように、学校や地域の人間関係が希薄な人ほど、中卒で社会に出ていく傾向にありました。これは社会で生きて行くには非常に厳しいと個人的には思います。だから、そういう人ほど、なるべく長い間、教育に包摂されている方がいいのではないかなと思うのです。そこで何か希望となるようなことはないかなと思って、他の心理学者などの研究を踏まえつつ、今から中学生のことを少しお話ししていきたいなと思います。そして、また結論から先に言うと、中1の1学期をどうするかということが重要なのではないかということです。

まずデータを示します(都筑, 2005)。これは小中学生の自尊心の変化を追ったグラフです。今日の午前の部でも、「自己肯定感」という言葉がでましたが、似たような概念です。要するに「自分のことが好きか」とか、「自分に自信があるか」みたいなことを聞いています。コホートごとの折れ線グラフなので、

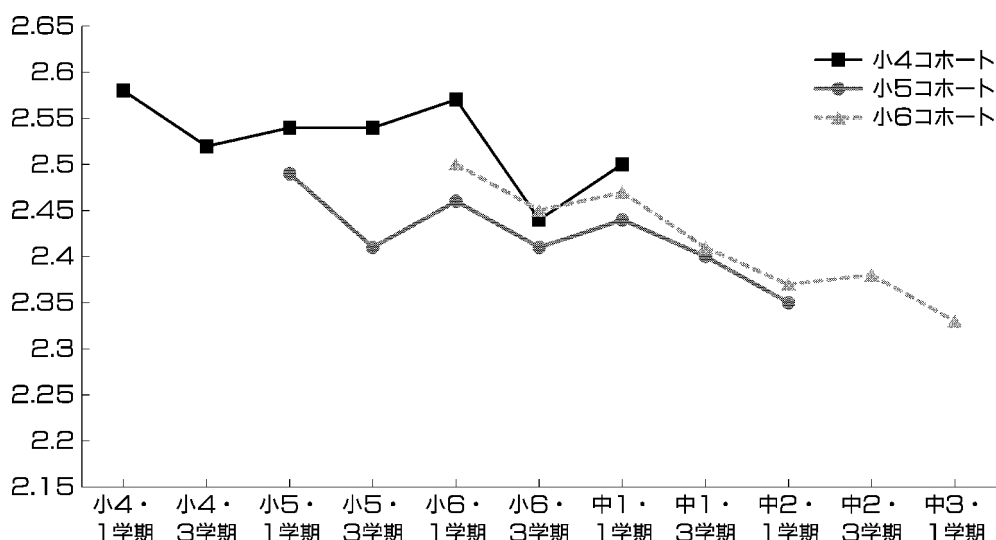


図 自尊心に関するコホート研究 (都筑, 2005)

小4コホートというのは、小学4年生の1学期の時点からこの調査を受け始め、中学校1年生の1学期まで追跡されているということです。同様に小5コホートとは、小学5年生の1学期から中学2年生の1学期まで、小6コホートは、小学6年生の1学期から中学3年生の1学期までということで、いずれも4年間追跡調査を行っているということです。

グラフを少し解説すると、折れ線グラフそれぞれの違いというのは、学年のカラーみたいなのを表しています。例えば、小4コホートは、小5コホートに比べて、小学6年生の1学期までは高い位置で推移していますから、自尊心が概ね高く、結構元気な学年だったのかもしれません。このように各コホートによって違うところもあるのですが、共通しているところも何カ所かあります。その中で特に注目したいのは、小学6年から中学1年生になるところで、どのコホートも自尊心が上がるということです。似たようなことは様々な研究で繰り返し確認されています（例えば、小野寺，2009）。

最近の子どもたちは自尊心が低いということがいわれています。しかし、よく見ると結構、学年による違いがありますし、変動もあります。ただ共通しているのは小6の3学期から中1の1学期のところで自尊心が一時的に上がるということです。ところが残念なことに、この変化は、学校の先生には見えにくい変化だと思います。なぜかという、小学校の先生からすれば、小学6年生3学期にかけて、子どもたちの自尊心下がっていく姿をみて、さようなら＝卒業ですし、中学校の先生たちからすれば、中

学校へ入ったときに上がっているのだけれども、でも自分たちが見られる3年間はずっと下がっていく姿だからです。そんなわけで「最近の子どもたちは自分に自信が持てない」みたいな話が教育現場では強くなるのかもしれませんが。しかし実は小中の移行を挟んで見ると、そこは結構ポジティブな変化があるのだということ、これに注目していただきたいです。

このようにとらえるなら、いわゆる中1ギャップといわれる現象も違う視点でとらえることができます。ふつう中1ギャップは、「中だるみ」とかいわれ、ネガティブな時期ととらえられることが多いです。しかし、発達心理学的に見ると、自尊心が一瞬上がる時期でもあるということ。要するにポジティブな変化が表れる時期なんじゃないかなというふうに、データから見れば考えられるのではないかと思います。

さらに興味深いのは、実はこういうポジティブな変化というのは、小学校のときに最も不適応だった生徒に顕著に起きるということです。例えば、次のグラフを見て下さい（都筑，2008）。

小学6年生の段階で、学校への適応や学習状況から、生徒を学校忌避群、勉強嫌悪群、学校教授群、勉強ストレス群に分け、それぞれのタイプの生徒が小学校から中学校への移行でどのように変化するかを追ったものです。各タイプについて少し説明をすると、学校忌避群というのは、一番適応が悪い生徒群です。要するに小学6年生の段階で学校生活も楽しくないし、勉強も楽しくないよと言っていた人

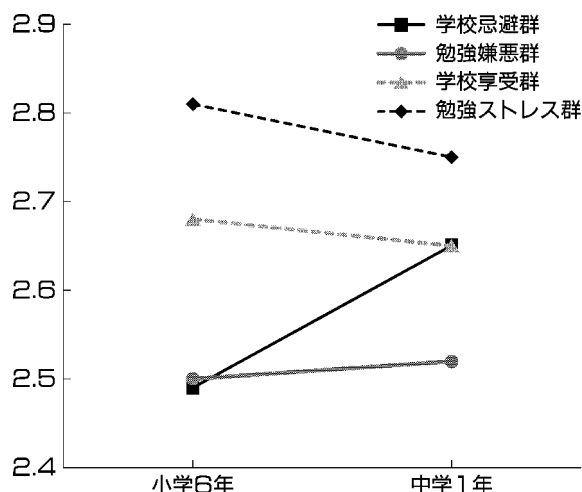


図 将来への渴望（都筑，2008）

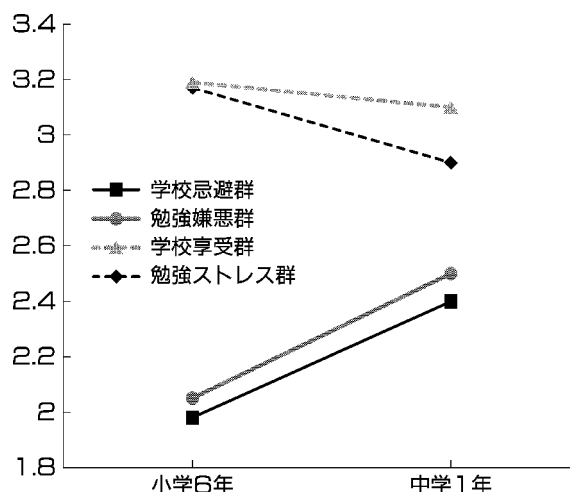


図 授業の楽しさ（都筑，2008）

たちです。次に勉強嫌悪群というのは、学校はまあ楽しいんだけど、勉強は嫌いみたいな人たちですね。そして、学校享受群というのは一番適応している人たちで、最後に勉強ストレス群というのは、勉強はできるんだけどストレスを感じているというような人たちです。それで小学6年から中学1年に上がるところで、どのタイプの人たちに変化が起きるかということ、例えば「将来の渴望」で見てみましょう。「将来の渴望」と言うと、ちょっと難しい感じがしますが、簡単に言うと、「自分なりに目標を持ちたい」とか「将来計画を持ちたい」、つまり、夢を持ちたいみたいな話です。では、どのタイプの人たちがこういう夢に関わる意識が高まるかということ、学校忌避群、要するに小学校のときに一番不適応を起こしていた人たちなのですね。それ以外の人たちはみんな微妙に下がっています。その中で、このタイプの生徒たちだけが、目標を持ちたい、将来計画を持ちたいという気持ちを高めているということです。

それから「授業の楽しさ」についても見てみると、やはり学校忌避群、もっとも不適応を起こしていた生徒群で上がります。それからもう1つ、勉強嫌悪群、小学校時代に「勉強は嫌いだよ」と言っていた人たちですね。この勉強嫌悪群という人たちも上がるんですね。ところが見ていただいたら分かる通り、小学校から個人内の変化では確かにこれらの意識は向上しています。けれども、中学校の先生が見えるのは、図の右側の中学1年生の部分だけです。そうするといくら学校忌避群の得点が上がったといっても、他の群との比較で見ると、やはり相対的な位置は低いのです。ですから、他の生徒との比較で見ると（たとえその生徒の中で小学校と比べて上がったとしても）、「モチベーションが低い」みたいに見えるかもしれません。だけれども、しつこいですが、個人内の変化で見るとぐんと上がるのは、実は小学校のときに一番面白くない思いをした人たちだということを、ここでは理解していただきたいと思えます。

こういう変化は他にも「勉強が分かる」でも起きて、「学校に行きたくない」ということについては逆に、学校忌避群と勉強嫌悪群の生徒たちだけが低下します。つまり、中学1年生の1学期の時点であれば、勉強のことも授業のことも将来のことも、

それから学校へ行きたいという気持ちにも、学校忌避群にはポジティブな変化が表れているんだということです。まとめると、「小学校のときに、ネガティブだった群にポジティブな変化が起きる」というのが、小学校から中学校の移行期であり、この時期を活かせるかどうか1つのターニングポイントになるのではないかとということです。ところが、中学校の先生たちとよく話を聞いて聞くのは、「中学生生活のターニングポイントは、中2の夏休みにある」というような話なのですね。要するに中2の夏休みに、そこである非行的な経験を積んで、学校へ来たら金髪になって非行化が始まり、手に負えない事態になっていくということです。そのようなわけで中2の1学期から夏休みをどう締めるかということが問題だという話になっちゃうんですね。もちろん、ターニングポイントは中2にもあるのかもしれないのですが、研究の結果からすると中1のほうにも、ポジティブなターニングポイントがあり、もっとそこに目を向けるべきなんじゃないかなということです。これこそがこの発表で提案したいことです。

今、現場で聞いていると、小中連携ということはよく言われて、実際に取り組みがなされています。で、そこで具体的に何がやり取りされているかというと、多くは、小学校のときに問題を起こした子の情報で、中学校はどういうふうに待ち構えるかということだったりします。これは私の個人的な経験に偏ったことかもしれませんが、やっぱり生徒指導的な対応で待ち構えていることがすごく多い。あの子は大変な子だから、ちょっと不適切な言い方かもしれませんが、男性の強面の先生のところに付けちゃおうとか、逆に子どもの気持ちがよく分かる生徒指導のうまい先生のところに付けようという話になるんだけど、先の研究結果（都筑，2008）から分かるのは、実は学習指導をどうするかということの方が重要なんじゃないかということです。要するに、待ち構えて、「最初が肝心」という感じで初めの指導でぐっと締めることよりも、実は「お前のために勉強を準備しておいたぞ」みたいな指導の方が有効なのかもしれません。一瞬やる気になっていますから、こういうときにどういう教材を提示できるかということが、実は大切になってくるんじゃないかと思います。もちろん現場の先生の中2に対するイメージ

というのは、結構当たっているところがあって、それを裏付けるような調査もあります。少年非行の再犯を予測する要因に関する研究なのですが、例えば、中2の学業成績が再犯率をすごく予測するということが言われています(岡邊, 2010)。具体的には、非行を起こした少年のうち、中2時の成績が「下」のグループと「上～中の下」のグループで500日後の再犯率を比較すると、「下」のグループの人たちの25%が再犯を犯しているのに対し、「上～中の下」のグループの人たちは10%未満の者しか再犯していません。こういう傾向は、700日後、1000日後と時間経過を経るほど、開きが大きくなる傾向があります。

つまり、中2の成績が悪いということは、実は非行の再犯を結構予測するということであり、さらに言うなら、中学校2年生のときに成績が悪いということは、再犯という点では、かなりリスクだということです。何が言いたいかというと、先生たちが言う、中2のときの生活態度とか、それから学力みたいな部分が、子どもたちの反社会的な行動というのを決めているというのは、感覚としては分かるのです。でも非行研究的にいうと、手遅れというよくないですが、この時点で介入しようと思っても、なかなか改善が難しいということが、データ上は言えると思います。

ほかにもいろいろ予測する要因というのがあって、よくいわれているのは向社会的な友人の存在です。非行少年というのは人間関係が悪いとか、希薄化しているから非行を起こすと言われますが、調査をすると支持されないことが多い。逆に結構、非行少年のほうが、一般少年に比べ人間関係はよかったです。ただ問題なのは、付き合っている相手がどういう人かということで、やっぱり非行少年の友だちには、非行少年が多く、それが逸脱行動を引き起こす要因になっていることが言われています。つまり、非行に関しては、「どんな関係を築いているか」よりも「誰と付き合うか」ということが大切だということです。先ほど取り上げた研究(岡邊, 2010)でも言われていることですが、向社会的な人(まじめでみんなに信頼されているような人)が、友人の中に少ない人ほど再犯の傾向も高まっています。要するに自分の周りで非行を犯す人たちがいっ

ぱいいれば、手段も学びますし、そういう雰囲気にもなりやすいので、再犯率も高くなるというシンプルな結果ですね。

お伝えしたかったことを、まとめていきたいと思っています。

1つは、「小中移行では小学校時に不適応だった群に、ポジティブな変化が起きるんですよ」ということです。2つは、「中学2年時の低学力というのが、再非行をどうも促進するらしいよ」ということ。それから3つ目、「向社会的な友人の存在が、再非行を抑止する」ということです。

最後のところについて付言するなら、要するに、非行しない友だちをたくさん持っているということがとても重要なんです。残念ながら向社会的な友人というのは、昼間のコンビニとかにはあまりいません。どこにいるかというと学校にいます。つまり、どういうことかということ、非行の再犯を防ぐには、その生徒を学校の中にどうやってつなぎ止めておくかということが、最大の課題なんだということです。これは学校の先生にとってはお耳の痛い話かもしれませんが、やっぱり帰宅指導(例えば、服装が整っていないということを理由に、学校に入れないような指導)をしてしまうと、非行(再犯)のリスクはどうしても上がってしまう。恐らく学校の先生からすれば、このことは感覚的に分かっているけどやらざるを得ないというのが現状で、現場の苦しいところだと思います。でも、それは再犯という視点から見ると、すごくリスクな選択肢なんだということは理解していただきたいと思います。

以上のことを考えるなら、再非行の抑止、このことは中学校以降の教育からの離脱を抑止することにつながらと思うのですが、それには、まず「中2の成績を中程度にどうやってとどめるか」ということ。それから、「日々の生活の中で学校の中に居られる」ということ。この2つがとても重要だということです。

そのときに中2になってから何か介入するのは、あまりにも大変になるので、じゃあ、中1の頭のところにあるポジティブな変化をどうやってつかまえることができるかということが極めて重要になってくると思います。しかし、自分の周りにいる現役の先生に聞くと、中1の頭は本当に忙しくて、そん

なことをやっている時間はありませんという話も聞きます。先生は忙しい。なので、大切なのはその忙しい中で、どこに労力を注ぐのが有効かという視点だと思います。そして、このように考えたときに、私自身は中1の頭のところの学習指導をどう厚くしていくかとか、あるいは小学校から中学校への移行期にある春休みのところで大学生とかをうまく使って、学習指導なんかということを入れられると良いのではないかと考えています。もちろん、すべての人が救えるとは思わないけれども、でも何か今よりもましなことはできるんじゃないのかなんてことを考えています。

それでは最後に全体をまとめておきたいと思います。まず「高校に行かないということが何を意味しているのか」ということが1つ目の問いでした。それに対しては、本当に彼らは何も持たずに、つまり、お金も持ってなければ人との関係も持たずに、携帯電話だけをもって社会に出ていっているというのが、実情なのではないかということです。ということは、やっぱり学校からの離脱が即、人間社会と言ったら失礼なんですけど、要するに地元社会からの離脱でもあるし、ある種の健全と言われる人間関係からの撤退ということともかなりの関連しているように思います。だから、いかにして若い人たちを教育につなぎ止めておくかということは、非常に重要な課題にこれからなってくるんじゃないかというのが、この発表を通して、訴えたかったことの1つめです。そのときに、学校が頑張るだけではいけないので、私たち研究者ができるのは、ささやかなことですけど、じゃあ、どこで頑張ればいいんだよって、どこで頑張ることが最も成果を出せるのか、成果ってあんまり言っちゃいけないな、教育が最も機能するのかということを考えてときに、問題を抱えている子どもの場合、中学1年時の初期だということです。

先ほど見ていただいた中学1年生のポジティブな変化というのは、実は2学期以降はどんどん消えていっちゃうらしいんですね。そう考えると、中学校入学直後にあるポジティブな変化を、どうつかまえるかというのがとっても大事なんじゃないかなと思います。これは、一方で中1ギャップというのが、すごくネガティブなイメージで広がってしまってい

るんだけど、実はこの時期こそ教育の力が最も発揮される時期だということを示していると思います。私が今の教育において問題だと思うのは、教師が教師として機能させてもらえない、あるいは教師が教師として勝負させてもらえないところです。給食費の取り立てとか、保護者対応とかという、やらなきゃいけないこととは思いますが、先生が一番力を発揮できるのは何はさておき、授業＝学習指導だと思います。「できれば誰よりもうまい授業をやりたいな」と思って先生になったっていう人って多いと思うんですよね。それに対して「誰よりも問題児を追っかけ回すのをうまくなりたいたいぞ」と思って先生になったなんて人はあんまりいないと思います。だから、そういう意味で、先生が一番、力を発揮してもらえるのは中1の頭のところじゃないのかなんていうふうに思っています。

それともう1つ大切なことは、実は、「支援、支援」って世の中では言うんだけど、それにはタイミングがあるということです。当たり前の話なんですけど、受け取る側のタイミングというのがあるんだということもしっかり理解していただきたいというのがあります。いつでも誰でも支援をしたら、それを受け取ってくれるほど、子どもは甘い存在じゃなくて、やっぱりこういうふうにやりたいよと思っている時期に、どうやって大人の側がかみ合わせていくかみたいなことが大切なんじゃないかなと思っています。それから、指導と学習の関係のとらえ直しです。どうしても生徒指導上の問題がある子どもに対しては、さっきも言った通り、どうやって厳しく指導していくかという話が多くなってしまうのだけでも、今、学校の教育現場を見ていると、それだけではなかなか苦しいなと思います。例えば、服装が整っていない。実は親が制服を洗ってくれなくてそうなっていることも多々あるのですが、制服以外の服装で学校に登校してきたとします。それがまた不道德な服装だったりするわけですね。そのときに、どうなっちゃうかという、「ルールを守らないんだから学校には入れないよ」、つまり、帰宅指導みたいなことが結構なされたりします。そうすると授業も受けられない、給食も食べられない、友だちにも会わせてもらえないみたいなことになっちゃうわけですね。個人的には1つ欠けちゃうと、すごく

失うものが多いのが日本の生徒指導の現状なんじゃないかなというふうに思っています。そういう中で、服装が整っていない子が学校に来たときに、言葉は悪いですが「お前みたいな奴こそ、勉強する必要があるんだから、授業だけは受けていけ」という指導の方向性も必要なのではないかと思います。つまり、生徒指導上の問題に、学習指導でふんばるという方向性が、これからとても大切な視点なんじゃないかなと思います。

それから3つ目なんですけれども、これは心理学研究に対する批判です。今、心理学研究ってどういう調査がはやっているかといったら、縦断研究がすごくはっています。もっと言うならば、発達障碍の問題とかも絡んでいるんですけど、幼少期のある要因が、小学校時とか中学校時とか、あるいは成人後の問題行動をどう予測するかみたいな研究がすごく増えているんですね。とらえ方によっては、要するに小さい頃の要因が、将来まで決めちゃうよみたいな取られ方をしてしまうような研究が、すごく多いです。それに対してここで示した研究が持っている意味というのは、実は何回か人生の中には、やり直せる（やり直したいと思う）時期があって、特に支援と相性が良い時期がありますよということを示していることにあると思うんですね。私たちがやらなきゃいけないことは何かというと、実はこういう細かなポジティブな変化って発達の端々にあると思うのでそれをしっかりと捕まえて、蓄積していく作業だと思います。でもその一方で、現在の心理学界では初期体験や生得性を重視する傾向が強まっているように思います。そういう意味でも自戒の念も込めて、初期体験重視ということを見直していく必要があるんじゃないかなと思います。ちょっと時間がオーバーしてすみませんでした。これでは私の話題提供にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答部分

(質問1) どういうアプローチで中1の危機みたいなものを、きちっとやる気になっていくということができるのか？

(質問2) 中1のところで、これは都筑学さんの

データですけど、中1のところで授業の楽しさが上がっているというのは、これは中1の授業を受けた後のデータでしょうか。

(加藤) 受けた後です。

(質問2) 受けた後。中1で授業を受けた後上がって。

(質問2) でも4月から、6月からではだいぶ違うと思うんですよね。

(加藤) そうです、6月の時点ですね。

(質問2) ああ、そうですか。それで上がったのに、その後落ちるというのが、どう考えたらいいのか？

(質問3) 中1の最初で、学習指導に光を当てることが大事だという点について、具体的にそういうことをやっている事例・成果、そういうものを持っていらっしゃるかどうかな。

(加藤) 答えやすい方からいくと、中1のところで取り組みをやって成果が上がっている事例や研究というのは、私自身は知らないです。なので、やりたいなと思っているというのが、正直なところで、そのためにどういうやり方があり得るのかということを考えています。それと授業がよかったからそう言っているのか、モチベーションが上がっているからそう言っているのかという問題ですが、中学に入ったときにそれこそリセットということじゃないですけれども、「小学校の時にうまく行かなかったから、中学でもう1度やり直したい」という感覚というのが効いているのではないかと個人的には思っています。また、その感覚が下がり始めるところには何があるかということ、中間試験が終わったりとか、期末試験とかがあるので、その後の影響というのはあるんじゃないかなというのが今思っていることです。したがって、1学期の定期試験前までのところでどういう取り組みをするかが大切で、具体的には、いったん上がったモチベーションを低下させないためにはというのが、ポイントになると思っています。

また小中連携の取り組みについて別の視点から言わせてもらおうと、例えば、うちの教職大学院の院生さんがやった取り組みがあります。それは中学生を小学校に派遣して、小学6年生に対して中学校の紹介をしてもらうみたいな実践です。この取り組みは、

どちらかという和不適群の生徒ではなくて、かなり学力や適応の良い子たちに効果的であったように思います。というのも、小学校の時に頑張っていた生徒さんたちにも「中学校へ行くと先輩にシメられる」みたいな思いがあるんですね。「部活が怖い」とか。逆に今の生活が充実している分、将来への不安が高いのかもしれません。なので事前に中学生が来て、関わってくれるということは、そういう不安感を下げるには役に立ったようです。

ということは何が言いたいかというと、小学校から中学校へ上がるときに、一括して中1ギャップとかいわれて移行を何とかしなきゃいけないと考えられているのですが、実はそこには生徒のタイプによって、ニーズの差があるのではないかと思います。したがって、小中連携といっても、いくつかの層に分けた支援策が必要になってくるんじゃないかと思います。

特に今日のお話で大切なのは、いわゆる小学校のときに不適応を起こしかけた子どもたちとか、低学力の人たちに対しては、「生徒指導的なかかわり」よりも「学習指導的なかかわり」の方が大切で、それは「勉強をしろ」ということよりも、「君が来るのを待っていたんだよ」という感じでかかわってもらえるような関わり方があるといいんじゃないかなと。そういうのは個人的にやってくださっている先生はいると思います。

中学校ではよく新入生が入ってくる前に「〇〇小学校の今年の6年生は大変だ」とか話しているのを聞きます。ただその6年生が、そのまま中学生になって、予想通り、中2ぐらいで問題が噴出する学校と、逆に問題がまったく出てこない学校があるんですね。むしろ「逆に学校に活気が出た」みたいなことを言っている学校もあります。そういう学校の先生に、「どんな取り組みをしたのですか？」と聞くと、案外「特別なことは何もしていない」とか「普通にやるべきことをやっただけ」みたいな答えが返ってきます。実際、そういう学校の実践をよく見てみると、「生徒指導的に特別なかかわり」をしているというよりも、「勉強を見るぞ」とか、よく先生の方から話しかけ、生徒の話を聞いているとか、ちょっと気になる子に「うちの部活に来いよ」と誘ってくれたりとか、通常、教師が生徒にやるべきことをきちん

と丁寧にやってくれている。包摂するような働き掛けをしてきているということがあるんじゃないかなと思います。

(司会) 外国の話を少しされたんですけど、ありますか。

(加藤) 外国に関してはさっぱり分かりません。ただ、国内で問題になってくるのは、小中一貫教育をどう考えるかという話があると思います。それこそ今日の発表で示した移行期の研究を行っている都筑学先生が最近書いていますが(都筑, 2011)、やっぱり校種が変わることによるポジティブな意味があるのだろうと思います。そのため小中一貫教育は、ここをリセットできない状態にするという問題をはらんでいるかもしれません。つまり、小学校で起きた問題をそのまま固定化していくという可能性もあるということです。そういう意味では外国の状況と比較して、小中一貫みたいな実践をすでにやられている国の教育問題の状況を調べることに、意味はあるでしょう。ただ私自身は外国のデータに関して分からないので、今後調べたいなと思います。

(質問4) 例えば中学校の英語。初めてでみんな同じ共通のスタートだから、ちょっと頑張るとか。

中学時代の友だち関係を全部リセット。誰も自分の知らない高校への進学願望。思春期や青年期のリセット機会。それがどういうふうに、生かされるか。要するに中退経験というのがリセットになるかならないのか。中退して大学に行っているやつって全然リセットがかかってない。もし「中退経験」を逆にリセットとして生かすとすれば、どういう生かし方があるのか。

それこそ学校の外と中の境界線上に、「いかがわしい空間」をつくるというようなイメージ。

(加藤) 「移行期にすべてこのようなポジティブな変化は起きるのか？」と言われると、たぶん高校のところでは中学ほど劇的には起きないだろうなと思います。例えば都筑先生の研究でいうと(都筑, 2009)、中学校からの高校への移行は結構複雑で、ある部分ではポジティブな変化が起きるのだけれど、ある部分ではネガティブな変化が起きるというようなことが指摘されています。なぜかという、やっぱり高校ではセレクションがかかるので、要するに、

自分の希望通りの高校に行けた人たちは上がるかもしれないけれども、自分の希望通りじゃなければ、そこで落ちてしまうという可能性があるんじゃないかなと思っています。

もう1つ言うと、なぜ中1で起きるかということ、中学入学にセレクションがかかってないということもありますが、発達心理学的に見れば、自尊心ってだいたい小学校の4年生ぐらいから高2ぐらいまで下がり続けるというのが、先進国の傾向として共通しているんですね。要するに下がっているところでどういうイベントがどういう形で起きるかということが、重要なんじゃないかなと個人的には思っています。

(司会) お1人ずつ、最後のまとめなり、ご感想なりを一言お願いしたいと思います。

(加藤) どうもありがとうございました。一言で今日のお話のまとめをするならば、自分がいつも考えていることなのですが、子どもを変えるというよりも、子どもにまず合わせていくことが大切なのではないかと。当たり前の話なんですけれども、そこを改めて大切にしたいなと思っています。例えば、現場に行くと、今日取り上げた自尊心や自己肯定感などがキーワードになって、それを高めようなんていう取り組みが、結構多くの学校で学年を問わずやられています。

でも心理学者の立場からするとそれはものすごく難しいプロジェクトで、発達的に見れば下がるのが正常なわけですから、維持するならまだしも、それを、上げるなんてことは相当難しいだろうなと思うわけですね。そのときに僕は、教育現場で何が起きているかということ、ある面で「ちゃんと子どもを見てないんじゃないかな？」と思うところがあります。つまり、普通に思春期の子どもたちと日常的に関わっている者であれば、この時期が「肯定や安定」などではなく、「否定や不安定さ」あるいは「揺らぎ」によって特徴づけられるものであることは誰だって知っていると思います。だから、こういう取り組みを見ると、教育目標のほうに目が行って、子どもが見えなくなっているんじゃないかと思っています。これはただ先生を責めてるわけではなくて、「子どもを見られなくなっている現場の状況」を見ないといけないということを言っているつもりです。そうしない

と悪者探しをして終わりになってしまおうと思いますので、「余裕を持って、子どもとかかわれるためにはどうすればいいんだろうか？」というところを、私は心理学者なのに、心の問題よりも「心の問題を十分に扱えるためには、どういう条件を作らなければいけないのか？」ということをもっと考えなきゃいけないのかなと今は思っています。

文献

- 新谷周平 2008 第6章 ストリートダンスと地元つながり 本田由紀編著 若者の労働と生活世界 大月書店。
- 岡邊健 2010 再非行の危険因子と保護因子 青少年問題 639, 8-13.
- 小野寺汐美 2009 小中移行期における学校適応に関する一研究 情報と社会(江戸川大学), 19, 15-24. 青少年問題調査研究会 2009 青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究報告書。
- 都筑学 2005 小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成 心理科学, 25(2), 1-10.
- 都筑学 2008 小学校から中学校への学校移行と時間的展望 ナカニシヤ出版。
- 都筑学 2009 中学校から康応への学校移行と時間的展望 ナカニシヤ出版。
- 都筑学 2011 第3章 発達論から見た小中一貫教育 山本由美・藤本文朗・佐貫浩編 これでいいのか小中一貫校：その理論と実態 新日本出版社, pp.52-67.